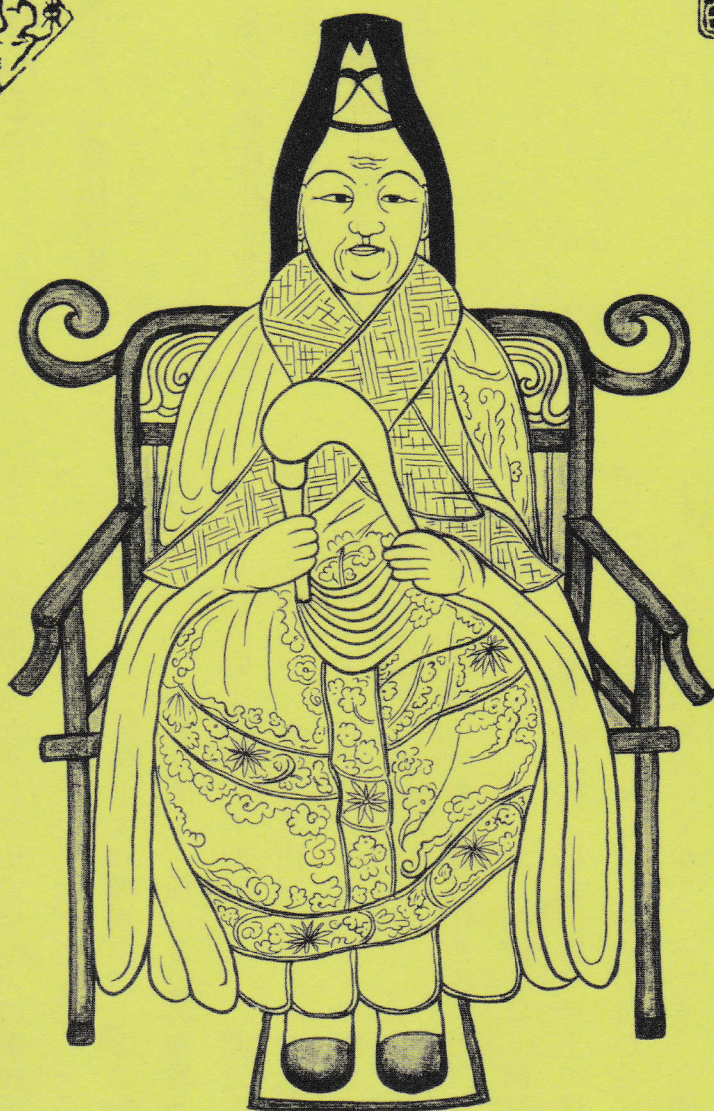


みおしえ



埼玉の名僧

吞龍上人
どんりゆうしょうにん



市川陽山謹記



埼玉教区浄土宗青年会

<http://www.saijousei.com>

例えば、買つてきた花束を飾るのであれば、はじめは華やかで賑わいがありますが、その花は何日か経てば必

ず枯れてしまいます。しかし、種を撒き、その種が芽をだし、葉をだし、その地面に根を張り、育って咲いた花ならば、たとえその花が枯れたとしても、種を残すことが出来ます。そしてその種は近くに散り、時間はかかるかもしれませんが、五十年、百年後には、花畑が出来上がります。

今回の八百年御忌は、法然上人を心からお慕いする人たちが作り上げた一つの集大成でした。それは今を生きる人たちだけでなく、法然上人から今に至るまでの多くの人たちの撒き続けた種が「ともにお念仏を称える」という花畑となったものです。そしてこの時代に生き、法然上人のお念仏のご縁を頂いているということは、これを読んでいるあなたも同じです。あなたが南無阿弥陀仏とひと声称えることは、今まで法然上人やご先祖様が撒いた種が花開いていることなのです。しかし、有難くもこの時代に生まれ、ご縁に巡り合えた方も、「今日は良いご縁を頂いた」と、その時だけで終わってしまっただけ、あまりにももったいないことです。なぜならば、結ばれたお念仏のご縁を相続してゆくということは、今度はあなた自身が咲かせた花の種をまわりに撒いてゆくことに繋がるからです。

あなたが尊いご縁の中で、今やつと出会えたこのみおしえです。これから、せつかく結ばれた無上の功德である往生極楽のご縁を、自ら断ち切ってしまうことがないように、ともに命終えるその時まで、南無阿弥陀仏を相続してゆきましょう。

合掌

執筆 東源寺 押野見孝道
文責 埼玉浄青広報編集局



表紙の解説（埼玉の名僧 吞龍上人）

一五五六年吞龍上人は、一ノ割村（現、春日部市）の井上家にお生まれになり、幼少時代を門前の圓福寺にて過ごされました。十四歳になられ、平方村（現、越谷市）の大善寺（現、林西寺）で出家され、炭弁（きゆうべん）上人の弟子となりました。大善寺で勉強に励み、しだいに頭角を現し、翌年には関東随一の学問所であった増上寺に入山し、研鑽の日々を送りました。

一五九〇年三十五歳の時、徳川家康公が江戸城に入られ、増上寺第十二世存応上人と共に家康公との親交が始まりました。そして一六一三年、家康公が自らの祖先を追善供養するため、上州新田郡太田（現、群馬県太田市）に大光院を建立する際、その開山上人として迎えられました。人助けに力を注ぎ、困った家の人々の相談にのり、苦しい農民の子供がいれば髪を剃って、自分の弟子として寺の寮にあずかつては育てていきました。現在でも「子育て吞龍さま」として知られているのは、こうした積み重ねがあったからなのです。

一六二三年、吞龍上人は大勢の弟子達に囲まれ、泰然として仏前に向かい、正座合掌してお念仏を称え、最期微笑みをうかべたまま、安らかな極楽往生のお姿で息を引きとられました。世寿六十八才でした。

合掌

解説執筆

崇蓮寺

池田真常

吞龍上人ゆかりの埼玉浄土宗十三寺院

西福寺	さいたま市大宮区桜木町二一五一六
淨念寺	桶川市南一〇六一一
蓮馨寺	川越市連雀町七一
回向院	草加市高砂一〇七一四
林西寺	越谷市平方二四九
圓福寺	春日部市一ノ割一〇三〇一七
淨信寺	久喜市栗橋東三一八一五
大英寺	加須市騎西一四〇四一六
勝願寺	鴻巣市本町八一二一三一
西運寺	深谷市深谷町三一八一
淨恩寺	寄居町大字保田原一一七
圓心寺	本庄市本庄三一三一
長福寺	本庄市児玉町八幡山一〇六一一

『子育て吞龍上人絵伝』参照



発行

埼玉教区浄土宗青年会

会

長 赤羽海衆

広報編集局長 齋藤宏賢

無断複写を禁止します